

## プログラム・ノート

堀 朋平

### ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第7番 変ロ長調 作品97「大公」

1792年にウィーンへやってきたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)。最初の一歩を刻む「作品1」として選んだのがピアノ・トリオだった。4声が調和する弦楽四重奏曲とはちがい、主役となるピアノに弦楽器の名手2人が加わる——よりアンバランスでスリリングな——このジャンルを、ベートーヴェンは愛した。

同じスタイルをなぞらず邁進するのが、革命家たるゆえん。その道は作品70(1808年)でもう窮められていたが、まだ先があった。その3年後の最終作では、かつてなく豊かに動くチェロの低音に支えられて、オーケストラのごとき奥行きのうちに3つの楽器が溶けあう。中期の到達点であるのみならず、ロマン派の扉を開く室内楽の最高峰だ。「大公」とは、本作を献呈された貴族にして弟子だったルドルフ大公(1788～1831)に由来するニックネーム。

緊張(ドミナント和音)を避けて、やわらかに音響を拡げてゆくのが第1楽章の秘訣。(3ではなく)5部分の交替による大規模な第2楽章につづく第3楽章は、ベートーヴェンしか書けない深遠な変奏曲であり、後期世界を予告している。3つのテーマが躍る第4楽章では、初演(1811年4月11日)でみずからピアノを鳴らした作曲家の満足げな表情が浮かぶようだ。

### シューベルト：ピアノ三重奏曲第2番 変ホ長調 D. 929

14歳にして全ジャンル制覇の意欲をたぎらせたフランツ・シューベルト(1797～1828)だったが、ピアノ・トリオはまばらである。15歳で単一楽章(D. 28)を試みてから、このジャンルが再浮上するのはじつに死の前年であった。

楽器の名手たちの人脈が広がったのも大きかったが、決定的なきっかけは秋の日、スウェーデンの若い歌手がうたう民謡に魅せられたこと——「見よ、高き山頂に陽が沈む／暗い夜影をまえにきみは消えゆく、うるわしの希望よ／さらば」。この葬送歌から作られたのが、第2楽章のテーマに他ならない。

消えゆく「うるわしの希望」には、半年前に他界したベートーヴェンが重ねられている。その一周忌(1828年3月26日)にあわせた生涯唯一となる「自作コンサート」で本作は披露された。この初演は大成功をおさめ、ドイツでの出版も異例のヒットとなるが、国境を越えてウィーンに初版譜が届くころ、シューベルトは31歳で旅だっていた。

第1楽章の勇ましいテーマと第2楽章の葬送行進曲は、ベートーヴェン『英雄交響曲』のそれぞれ第1・2楽章をなぞっている。第3楽章はをさんで第4楽章では、葬送行進曲が——まるで亡靈の回帰のように——何度もかえってくるが、ラストでは高らかな凱歌となる。